

# あげじゃびよ～ マンゴの樹の下で

木村 匡  
阿嘉島臨海研究所

Greetings from the lovely people at Akajima Island

T. Kimura

「あんた達がいろんなこと研究しているように、おじさんはねえ、野菜作ったり木を植えたりすることは昔から研究していて、発表できるくらいよおく知っているよ。今、裏の畑にはサニンやバナナ、カキの樹がある。レイシなんかも植えているよ。この前は、浩ちゃん（研究所の初代シェフ）がブドウの苗を送ってくれたから畑に入れてね、ようやく芽が出てきたよ。でも、一番はなんと言ってもマンゴさね。今からおじさんの畑、見に来る？」

研究所の船長、もとちのおじさんがいつものように突然現れたのは、この冬一番の寒さという日。その日は朝から北風が強く、海に行けないため、おじさんは暇を持て余していたのかも知れない。早速おじさんと一緒に、阿嘉小中学校の裏にある畑に向かった。マンゴ畑といっても、それは周囲をフェンスで囲み、上部にシートで覆いをしたビニールハウスのような果樹園だった。中には愛犬ミッチーの次に可愛がっているアヒルの夫婦が放し飼いされていた。

「これが、マンゴの樹よ。近頃は花粉を運ぶ虫が少なくなったから、ここじゃハエを使っているさ。ちょっとこれ見てごらん。この、樹につるした缶の中に、こうやって残飯や魚を置いておくと自然にハエがわくよねえ。そのハエが花から花へと花粉を運んでくれるわけさ。これなんかもう実ができています。ほら、この先の所にいっぱいについている小さなつぶつぶよ。でも、これ全部大きくなったらたいへんよ。1人100個も200個も食べられるくらい実がなって、枝が折れてしまうからね。育ちの悪いのは取ってしまって、漬物にする



さ。この樹は、ただ植えているようだけれどね、とても難しい樹よ。樹と樹の間は4mは離して植えなさいといわれていてね。2.5mぐらいいか離さなかったこっこの樹は、実のつくのが遅いよ。これなんかはもう少し離して植えたから、よおく育っているよ。葉っぱも広くて長いさあね。それから、肥料やなんかが多すぎると、この樹みたいに弱ってしまう。そう、肥料には枯れ葉を使う。根のまわり、半径40cmぐらいのところに穴を掘って、葉を埋めるわけよ。そうすると、中で

腐って肥料になる。アヒルの糞も肥料になるよ。このアヒルはねえ、人間の目に見えないような小さな虫をつついて食べてくれるんだよ。これ、この幹の下のところがきれいになっているよねえ。これみんなアヒルが掃除してくれたところよ。小鳥もよく入って来て、樹についた虫を食べているよ。あんた達、ここには雑草があんまり生え

てないのに気がついた？これは、古い絨毯を地面に敷き詰めているからだよ。そうやって、雑草を押さえつけているんさあね。この小さな実も、5月6月頃になれば立派に収穫できる大きさになるから、その時はこう、こっから写真撮って、額にでも入れて飾ろうかねえ。」

島の人たちは昔から、自分の食べるものは自分で手に入れる自給自足の生活をしてきた。化学肥料や農薬を使わない農業は手間がかかるが、島の人たちは皆、そんな仕事をとても楽しそうにやっている。そして、研究所の食卓を時々にごませてくれるのも、そんなおすそ分けだ。今日もおじさんは、孫を喜ばせるために、マンゴ畑へ見回りに行く。